

桜田句会 (東京都・港区) 2~3

橋本世紀男 (東京都・江東区) 4

詠み人の『リレーエッセイ』俳人 小津夜景 16

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニユース

# 喜怒哀楽

4-5  
Vol.97

## ここに響くことば

新潟県糸魚川市出身の批評家・随筆家若松英輔氏の著書からここに響いた言葉を抜粋してご紹介します。

旅とは、物理的にどんなに遠くに行っても、自らの内なる原点に還っていかうとする人生の挑みのようにも感じられる。

人は、真の旅を求める。ほとんど本能的にそれを希求する。もし、抗しがたい力によって一世に言うレールに乗って一あるところへ到達したとしても人は、その地点から必ず、自分の旅を始めることになる。

——『言葉の羅針盤』「旅のはじまり」より

### ●若松英輔

- 1968 年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。
- 2007 年「越知保夫とその時代 求道の文学」にて第 14 回三田文学新人賞評論部門当選。
- 2016 年「観知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦」にて第 2 回西脇順三郎学術賞を受賞。



「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

## 温古知新 50 「菜根譚」22

もう春ですね。ぼかぼか陽気で日光浴も良いですが、「菜根譚」でものんびり読んでみるのはいかがでしょうか？今月も「菜根譚」をご紹介します！

清なるも能く容るる有り、仁なるも能く断を善くす。明なるも察を傷つけず、直なるも矯に過ぎず。是れを蜜餞甜からず、海味鹹からずと謂う。纒かに是れ懿徳なり。

(清廉潔白でありながら受容性があり、慈悲深いが決断力もある。頭脳明晰でありながら批判し人を傷つけることは無く、正直だが介入的でない。このような人物は、甘すぎない砂糖漬けや、塩辛すぎない珍珠のようだ。それが立派な美徳なのである。)

甘すぎず厳しすぎず、行きすぎる事が無いのが良いのでしよう。

貧家も浄く地を払い、貧女も浄く頭を梳れば、景色は艶麗ならずと雖も、気度は自ずから是れ風雅なり。士君子、一たび窮愁寥落に当るも、奈何ぞ輒ち自から廢弛せんや。

(貧しい家でもしっかりと掃除をし、貧しい女性でも綺麗に髪を梳いておけば、見かけは美しいとは言えなくても魅力的である。だから、一人前の人間は、困難な状態に陥っても逃げ出さないものだ。)

どんな状況でも、一人前の人間はやるべきことはやる、そういう人でありたいものです。

閑中に放過せざれば、忙処に受用有り。静中に落空せざれば、動処に受用有り。暗中に欺隠せざれば、明処に受用有り。

(閑な時でも放っておかなければ、忙しい時でも役立つ。静かな時でもぼんやりしなければ、何事があった時には役立つ。誰も見ていない時でも人を欺かなければ、人前でも役立つ。裏表なく正直に生活していること。それがいざという時に役に立つのでしよう。)

今回は 86 項までご紹介しました。備えあれば憂いなし。しっかりとすべきことはし、常に手を抜かないことが自分のためにもなる。心に刻んで新しい季節を迎えましょう。

(古川久美子)

# 桜田句会

(東京都・港区)

街中には半袖姿の人も見かけるほど暖かくなった3月1日(木)、新橋駅近くの桜田会館で行われた「第一五八回桜田句会」にお邪魔しました。

この会は、指導する主宰や代表を置かない超結社の会。人数は多くないものの、各人が他の会を指導していたり、各結社の同人であったりというハイレベルな句会。本日は、当季雑詠5句と席題(詠み込む季語や言葉がその場で告げられる)は「流」「乗」の合計7句出句の6句選。点数の高い順に、その句を選んだ方が講評していきます。

○跡を継ぐものなき畑や雉子鳴く 恵一



▲皆さんがこの句会を心待ちに!

あると思うが「雉子鳴く」という季語で、段々畑があるような里山の景を思い浮かべた。雉子の鳴き声は、古くから万葉集でも詠われているが、春の兆しを感じさせるケンケンという取り合わせにジーンとしみ込むような寂しさを感じ、特選でいただいた。

○もう耕運機の音も聞こえない、広々とした畑が放りっぱなしにされている景が見えてくる。

○雉子のビリビリくるような声を吉野で聞いた。その声に対して跡を継ぐものなき、草が生えたような畑、実によくできています。何を鳴かすより雉子を鳴かせた方がいい。

○これは「畑」でいいの?  
○具体的な景が見えてくるからこれでもいい。「家」じゃだめ。「畑」だから、枝ではなく下で鳴いているのがわかる。

芽起こしの雨に音なし 流人墓 水香

○静かな雨は春雨なのでしょう。流人墓がいいかどうかはあるが、静かな景で悲しみもある。

○「芽起こしの雨」でやわらかい、静かな春の雨という感じが伝わり、そこに流人墓がひっそりと。取り合わせがいい。

○席題の「流」での作だと思いが、それにしても上手(笑)。人も訪れないような静かな墓、そこに芽起こしのさうらつと降る雨が呼応している。

○今は訪れる人もいない、幾星霜をそこにあった流人墓にも春はくる。芽起こしの雨に音がないのはわかるが、あ



▲本日の名司会はまさるさん

えて「雨に音なし」といったことで、静かに流人墓を濡らす周りの景や空気が感まで見えてくる。無縁墓ではダメで、流人墓だと佐渡辺りを思い出す。作者「流」という字に感謝(笑)。

仏唇の動く気配や梅開く 裕子

○仏様の唇だから動くことはないが、梅が開き、ようやく春になってきた、その時に少し唇が動いたように感じたという作者の気持ちがいい。

○俳句は気配を詠むものだと聞いたことがあるので「気配」という言葉を入れてはいけないのか?と思うが、「気配」がこの句の命。仏唇の動く気配と、梅開くの取り合わせでいただいた。○仏唇という言い方が硬い。むしろ手が動いた方がいいのでは。

もの芽の祈るかたちに膨らめり 一行

○どんなに小さな芽でも、ものの芽は祈るかたちだと改めて感じた。  
○同じものの芽でも、枝でなく土から生える蕨やぜんまいの方だと思った。

○祈るかたちという言葉はよくあり、類句がある。

虫出しの雷や錆びたる肥後守 水香  
※肥後守：日本で戦前から使われている簡易折りたたみ式ナイフ

大杉のますらを立ちに冴返る 清江  
○ますらを立ちという言い方もいいし、冴え返るもぴたつと効いている。

○お寺で見る大杉、あれをどう詠んだらいいかと思っていた。ますらを立ちに、まいったなあという感じ(笑)。

百すぢの垂水や芽吹く柞山 水香

○至る所から垂水が枝や葉を伝わって落ちてくる。それはどこからかというところ、芽吹きが始まった落葉樹の林、柞山からなんだよ、という句。切れもテーマもよく、もう一つ別の句ができそうなくらい素敵な言葉を並べて、春の山を表現している。

うららかや海へひろがる鶯の笛 清江

○海へひろがる鶯の笛で、まさに春うららかな気分が出て、身体の中が開くような心地がする。これでもかかっていうくらい気持ちいい句。

咲き足りて落つるほかなき椿かな 一行

○椿ではないものを想像したが、山茶花は散るだし、落ちるのは椿。咲いたら落ちるほかないという人生観のようなものもいい。

○「落つるほかなき」がちよっと理屈っぽい。



○でもこれを言わないと強調できない。  
交絶えてよりの歳月梅ひらく まさる  
○この頃便りがなくなつたな、と思いながら時が経ち、もう梅が開く時期になつたのに：と心配している様子が伝わる。

煮返してひとりの膳や春の雪 清江  
○一人住まいだから食べきれない昨日のものが残っている。それを煮返してまた食べている、そこに春の雪。侘しさもあるが、こうやって生きていてよかつたという感じもある。

○「煮返して」に、丁寧な暮らしぶりが見える。まだ寒いがあたたかい気持ちになつているような、過不足のない生活が伝わる。

○採つたけど、膳が気になつた。「ひとりの夕餉」ではどうか。

萌え出づるものにやさしき春の土恵一  
○この通りだが、あえて言っているところがこの句のよさ。いろんなものの芽が出てくるが、春の土が、育つまでは分け隔てなくちゃんと守っているよ、ということを素直に詠んでいる。

河曲り曲りて海へ菜の花忌 まさる  
○舟で山間を通り、曲がるごとに景色がかわる。次はどんな景色が見えるのだろうという期待感、そして最後に菜の花の黄色がぱつと飛び込んでくるという鮮やかな句。

重なりし絵馬に風鳴る余寒かな 清江  
○今、受験期でつるしきれないほど絵

馬が重なっている。冴え返るより柔らかい感じが余寒。合格したのかな、という思いが余寒に出ている。

春風やこころ鬼にも佛にも 一行

○「こころ鬼にも佛にも」は、詩になりにくい言葉。それなのに春風をもってきたことで、私にはよくわかる句になつた。春の風は春風、東風、涅槃西風、貝寄風、春一番、風光る、春嵐というように様々ある。他の季節を考えた場合、そういう変化のすぐくある両面を併せ持った風はない、春だけ。鬼にも佛にもなれる人間の心。それを括るには括り切れないが、春風と言われれば、うーんと納得。こういう使い方もあるんだなど、詩の言葉にならないものを詩に見せられた感じ。

膝折りし鹿のめつむる涅槃寺 まさる

○暖かさを堪能しながら膝を折って寝る鹿。その姿が仏様の亡くなったことを、一緒になつて祈っているように見えたということ。俳諧味もある。

分ちあふ光の欠片犬ふぐり 水香

○小さな犬ふぐりは、光に群れて吠く。それを光の欠片を分ち合っていると捉えている。何を言っているわけではないが、分ちあふという言葉によって、陽だまりに寄り添って生活している犬ふぐりが浮かんでくる。

曲乗りの山高帽子風光 水香

○きゅつとしまつたような明るい日差しの中で見る、曲乗りの山高帽子。山高帽子に焦点を当てて、そこに風光

る。「乗」の席題としては意外性があり、景が見え、空気感もわかる。

みほとけやのりしろの無き二月果つ 裕子

○二月は短い、冬から春へ変わる季節。作者は明るい気持ちになり、仏が表れたように感じたのかな。みほとけという付けようのないものをもってきたところに、おもしろみを感じた。

大正の古色も乗せて雛の段 和子

○雛の段が、古色蒼然たる様々なものを想像させる。

観音の寝姿の山笑ひをり 和子

○観音の寝姿の山というだけでなんとなくうれしい。その山がいよいよ春を迎えたという、あたたかさを感じる。

○寝姿山は伊豆下田や広島島の宮島など全国に結構ある。

春は曙ひそひそと衣の音 影法師

○「春は曙」で枕草子を想起させる。当時の十二単の女人たちがひそひそと言葉を交わしているようでもあり、曙だから男女の睦言ようでもある。そして最後は「衣の音」なんとも雅やかでムードのある句。

○春は曙が光る句。解釈としては2つ。殿方が「そつと抜けていこうかいな」と、曙の中をお帰りになる。もう一つは家人はまだ寝ているが、私は春の曙の句を作りたいので、起こさないように静かに着替えて出かけますという健康的な句(笑)。衣の音がよかつた。

待つに慣れ女老いけり山笑ふ 美子  
○この方も長い間待つ暮らしをされてきた。「そつというものなんだな」という諦観の気持ちで、山笑う山を見ている女の姿が見えてくる。

○今の女は絶対に待たないよ(笑)。女を女とすれば、昔の女性になる。

★即吟でご覧のとおり素晴らしい句を作られることにまずは驚嘆。講評からも、各人の頭と心のなかには、どれだけの知識と経験と言葉と感性があるのだろうと、お一人おひとりをしみじみと眺めてしまう。90歳というお歳ながら、お洒落で、誰よりも大きくよく通る声で名乗りを上げ「毎日が本当に楽しいの！」と、瑞々しい句を作られる清江さん。そんな清江さんを中心に、俳句と人生の練達に出会える桜田句会です。(木戸敦子)



▲先輩後輩分け隔てなく民主的で平和的な桜田句会

# 橋本世紀男様

## 『五七五は命のリズム』

(東京都・江東区)

本年1月『五七五は命のリズム』を出版された橋本世紀男さんにお話をうかがいました。

**Q ユニークな句集です**

俳句だけを毎日一句ずつ一年間まとめた句集は珍しくありませんが、俳句と川柳の両方を載せた句集はないのでは？との素人考えで、なるべく前例のない句集をめざしました。1月1日から12月31日まで、毎日、俳句と川柳を一句ずつ掲載し、五七五の間は一字空けに。以前、俳句会で合同句集を発行した際、私の句は五七五の間を一字空けるよう依頼したところ、前例がないと断られ、ならばいずれ自費出版で実現しようと思っていました。

**Q 大変ではなかったですか**

川柳は割と自由に選べましたが、俳句はどの句をどの日にもつてくるかが



▲俳聖芭蕉にあやかるべく記念像とともに

非常に悩ましいいうえ、時事川柳は鮮度が命、やむを得ず割愛せざるを得ない句も多くありました。それでも『五七五は命のリズム』というタイトル上、リズム感のある句に絞り込み、字余りの句は入賞・入選作品でも削除しました。

更に酷似句、類似句のチェックにかなりの時間と労力を費やし、疑わしい句は新しい句と入れ替える等、徹底しました。この作業が一番しんどかったです。

**旅立ちには別れの地なり春惜しむ**

**Q 扉にはかわいい♡入りの書が一枚**

これは親戚の橋本心花(10歳)の作。書道を学び始めて4年ですが、結構上手いのかいろいろ賞を受賞しており、ならば命のリズムは鼓動、心、この本に最適と思ひ、書いてもらいました。幼いながら、何枚も書き直してくれうれしかったですね。「心」という一字のおかげで句集が生き生きと輝いたと思っています。



▲366日分の俳句・川柳732句を収録扉にはかわいい♡入りの「心」の文字

**Q 俳句は昔から？**

俳句を始めて10年近く。当初、銀行

OBの句会に入ったこともありましたが、結社には入らず、でも独善的にならないよう、俳句の専門誌や俳句大会への投句など、他流試合を通して学んできました。俳句大会の作品集を見ながら「なぜ感動を覚えないこの句が特選に選ばれるのか？自分の勉強が足りないからか」と、頭を悩ませるわけです。でもわからない、だから悔しい(笑)。そこで勉強するのですが、勉強したいことがあり過ぎて追いつかない。学べば学ぶほど俳句はわからない、だからこそ、続けているのかもしれない。

**Q 二出身は宮崎とか**

宮崎県の田舎で、兄弟や友人たちと裸足で走り回っていました。娯楽なんてない時代、先生の家から大人向けの文学全集を借りては、安吾も太宰も意味はわからなくても全部読みました。それが私の文学の原点かもしれません。数学は得意で、難問には数日かけて挑むことも。この時の経験が、その後社会人になり困難な状況に直面しても、粘り強く真正面から取り組めば「解はある。道は必ず拓ける」という自信となり、何事にも忍耐強くなりました。

**Q 完成した本はいかがでしたか**

立派な仕上がり我感到、喜怒哀楽書房の皆さん、特に木戸さん、菅さんに感謝しながら愛飲の芋焼酎で祝杯をあげました。以前、東京の出版社から本を出したことがありますが、御社の丁寧な校正と心のこもった「お客さまファースト」の姿勢に、信頼感と安心感を覚えました。新潟よりも東京の出版社に頼んだ方が便利では？と思いますが、メールやファックス、郵便や宅配の活用で御社の方がはるかに適切な対応をしてくださり、友人・知人にも自信をもって勧めたいと思っています。

**Q これからは？**

親戚、友人、知人に句集をお送りしたところ、想像以上の反響でご祝辞やお祝いの品をたくさん頂戴しました。次は俳句だけにして「梅」「桜」「雛」「燕」「蝶」「蛩」「月」「富士山」など、季節ごとにまとめようかななどと、次の句集の構想を温めています。調子に乗ってますかね(笑)。いずれにしても、俳句は心穏やかじゃないと詠めません。だから夫婦喧嘩をしないようにしているんです。じつと耐えてね(笑)。

**Q 除夜の鐘喜怒哀楽の響きかな**

★お話の中で時折耳にした「悔しいんですよ、これが」に橋本さんの源泉を見た気がした。なぜできないか、悔しい、だからやる、ダメだったらなぜダメかを考えてまたやる、そしてより良くなつて今がある。常にチャレンジ、常に成長。毎日の晩酌は地元都城の芋焼酎、黒霧こと黒霧島。「これが飲めなくなつたら、俳句も詠めないと思います」の言葉に、大きくうなずくのでした。

**榜目には夫婦円満俺が耐え**

(木戸敦子)



# 投稿作品

## 俳句

※誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、266でした。  
※しめきり 2018年5月15日(火)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。

- 1 リハビリの汗して励むマンパワー  
河野静子(埼玉県)
- 2 花丸の答案用紙山笑ふ  
紺谷睡花(東京都)
- 3 大噓妻の寝息を止めにつけり  
重原爽美(新潟県)
- 4 黄水仙からだほくして今日生さる  
井田由利子(宮城県)
- 5 志願した予科練語る生身魂  
山崎吉晴(群馬県)
- 6 ひめゆりの塔に来て鳴け百千鳥  
古谷 力(東京都)
- 7 梅一輪活けて老舗の甘味処  
高崎登喜子(東京都)
- 8 書初めに進歩の跡ありハネとトメ  
白松いちろう(千葉県)
- 9 酔ひざめや一気に喉へ寒の水  
田野倉訓郎(東京都)
- 10 卒業子ふと校門を振りかへり  
村田吉雄(東京都)
- 11 鷹鳩化できぬ憤怒のフクシマ忌  
福岡 悟(東京都)
- 12 この寒さ何時まで続く金縷梅  
西條公雄(埼玉県)
- 13 新成人大海原に船出して  
田中恵美子(山形県)
- 14 つくづくと眺む手の皸春炬燵  
檜山柚子香(東京都)
- 15 佐保姫のほほゑみ程の湖の波  
天野輝子(東京都)
- 16 駆け登る三毛猫の声冬木の芽  
田野井一夫(栃木県)
- 17 空こがすライトアップの冬紅葉  
片山茂子(埼玉県)
- 18 吉祥や孫を励ます新学期  
内河邦久(東京都)
- 19 永らへば雪来る予感がん告知  
上村元義(神奈川県)
- 20 寒過ぎて未だに踏めぬ春の土  
杉村美保子(岩手県)
- 21 鶴舞ふや高倉健はもう居ない  
井上静夫(栃木県)
- 22 初恋はあの頃あの娘水温む  
近藤薫也(千葉県)
- 23 凧に転がって行く爺や婆  
居原田暹(大阪府)
- 24 児童らに声をかけつつ雪を掻く  
中島光江(埼玉県)
- 25 捨て猫にミルク飲ますやかい巻や  
松尾らん(東京都)
- 26 身に沁むや一つ病の加はりて  
宮宅芳子(岡山県)
- 27 俳句とは暮らしの一部春立てり  
井原毬子(東京都)
- 28 代筆で届く書状や冴返る  
川口 襄(埼玉県)
- 29 カレンダーやさしく捲り花を待つ  
大谷 茂(埼玉県)
- 30 春浅き庭に見知らぬ猫二匹  
吉里ひとみ(東京都)
- 31 吹かれ散る櫻花の作る水輪かな  
梶 進(北海道)
- 32 錫杖の上人像や花酔木  
津田忠彦(岡山県)
- 33 春めくと鼻毛の伸びの気になりし  
松嶋光秋(東京都)
- 34 夜の海金魚に魅せらる人魚達  
白戸麻奈(東京都)
- 35 大寒や白菜大根見舞ふ木戸  
有坂馨園(福島県)
- 36 新しき草木育む春の雨  
堅田秀子(東京都)
- 37 大和路の春や手彫りの如来仏  
橋本良子(埼玉県)
- 38 誤字のある絵馬のちらほら春寒し  
長峰正晴(千葉県)
- 39 糺るや日本列島ひとまたぎ  
三津木俊幸(千葉県)
- 40 すくもから一つづつ出す寒卯  
岩崎政弘(岡山県)
- 41 手造りのチョコ自慢する下心  
石尾曠師朗(東京都)
- 42 まほろばの富士を背に梅の丘  
杉原明子(静岡県)
- 43 せせらぎの蕾解ぐるる露の臺  
小澤円梨(静岡県)
- 44 笹鳴の崖の日向を移りけり  
佐野和彦(静岡県)
- 45 露の臺疎遠となりし家郷かな  
田中 昶(鳥取県)
- 46 日脚伸ぶ歴史を語る虫籠窓  
中田文子(大阪府)
- 47 ほほえんで髪撫でながら雛飾る  
磯部 力(新潟県)
- 48 時くれば水仙の庭空青し  
竹本芙美子(新潟県)
- 49 跡を継ぐ者なき畑やきぎす鳴く  
関山恵一(神奈川県)
- 50 遊べよあそべ孕み雀よ来て遊べ  
椋本望生(大阪府)
- 51 一山に響く魚鼓の音余寒なほ  
宮崎敏昭(埼玉県)
- 52 公民館よりのコーラス山笑ふ  
鈴木清子(埼玉県)
- 53 大寒波瑞穂の国へ数珠つなぎ  
佐々木素風(新潟県)
- 54 ゆつたりと独りの生活七草粥  
青木ケン子(埼玉県)
- 55 歴日や亡き母の夢雪の原  
藤井春三(埼玉県)
- 56 節分の日の句会にて豆貰ふ  
湯浅芳郎(岡山県)
- 57 憚らぬ二度寝倅せ春の朝  
浦橋渴雪(兵庫県)
- 58 風花や亡き母からの便りとも  
吉村充治(埼玉県)
- 59 楽しいげにカッパの皿に梅咲けり  
松田重信(埼玉県)
- 60 亡き友のくれし俳書や春惜しむ  
岩村 昇(神奈川県)
- 61 老夫婦あたりはばかり豆を撒く  
水落重武(新潟県)
- 62 のどけしや目の前にある河馬の尻  
小林七重(新潟県)
- 63 廃屋の庭紅梅の乱れ咲く  
清まさし(静岡県)
- 64 野火猛る風の中より亡父の喝  
中嶋清子(佐賀県)
- 65 帯雲の富士より揺るる枝垂梅  
神 一男(静岡県)
- 66 駒返る草にうす雲わらべ唄  
岩田 信(神奈川県)
- 67 深層の迷ひ吹つ切る春疾風  
大阿久雅子(埼玉県)
- 68 句を杖に旅立つ朝や初しぐれ  
阿部徳夫(宮城県)
- 69 来し方を踏む深々と落葉踏む  
大窪美代子(大阪府)
- 70 江ノ島や白い波たな麗わしく  
五味田幸夫(東京都)
- 71 寒戻る兜太さん多喜二に会えたか  
星 一子(神奈川県)
- 72 さい銭の額相応に初詣  
若月理依子(新潟県)



- 73 展望より鶴の孤独を見つめけり  
岡野智恵子(埼玉県)
- 74 春の風孫とびきりの笑顔して  
川嶋法子(東京都)
- 75 櫻咲き水天宮に参詣に  
宇田川正雄(埼玉県)
- 76 雲低く黙に沈めり雪の里  
望月哲士(東京都)
- 77 入相の鳥騒がしき春の風邪  
有田俊一(埼玉県)
- 78 あの角に梅の目印古里の家  
堀田寿美子(北海道)
- 79 大雪の陣中見舞はひとめぼれ  
小島岳青(新潟県)
- 80 齢積み更なる夢や梅一輪  
木村 舳(山形県)
- 81 六キロ減インフルBの二週間  
富樫和子(山形県)
- 82 昼風呂や揺れあきもせで猫柳  
菅原キイ子(宮城県)
- 83 母の寝息置いて厠へ春の星  
高垣勝代(大阪府)
- 84 厳寒によくぞ咲きけり梅の花  
井上氣海(広島県)
- 85 始業時の安全唱和春隣  
夏井寛治(新潟県)
- 86 春雨にけぶりて遠き淡路島  
平林義康(兵庫県)
- 87 鼻べちやの人形焼や春炬燵  
一瀬正子(埼玉県)
- 88 厚着して皆既月食観察す  
津布久信雄(東京都)
- 89 こけし雛梅の香りをほこらげに  
長谷部喜代子(大阪府)
- 90 行く春や小欲知足に暮しをり  
道給一恵(埼玉県)
- 91 むらさきのしなのこいしい桔梗かな  
五十嵐陸博(新潟県)
- 92 幼児のおひなまつりの招待状  
白川 博(新潟県)
- 93 鴻巣の一万体のひな飾り  
本庄準也(埼玉県)
- 94 雪小路前行く老女に歩を合わせ  
田中こづえ(北海道)
- 95 鋭き声の鳥の来てゐる厚氷  
高松玲子(埼玉県)
- 96 春興や無職無役の月曜日  
大橋恒次(新潟県)
- 97 天日のしろがね色に雪の降る  
平山千江(岩手県)
- 98 捨て切れぬ冬物並べ刻止まる  
金子範子(高知県)
- 99 春動く寝釈迦の指の御光かな  
大塚徳子(埼玉県)
- 100 湯豆腐や老の揉めごと湯気が消す  
岡村君枝(茨城県)
- 101 九条を守れと撒くや鬼は外  
中野勝子(鹿児島県)
- 102 晩年の父に諦念梅真白  
中澤寿美(神奈川県)
- 103 初電話転がり来るは友の声  
伊藤久枝(埼玉県)
- 104 あの世でも新年はあれウィーン・  
ファイル 中山日出子(大阪府)
- 105 野を焼きて夢もさめるや土の中  
松前邦広(千葉県)
- 106 犠牲者にまず黙とうし出初式  
中村康浩(福岡県)
- 107 粗末なる遺品の戎衣沖かすむ  
今井勝子(新潟県)
- 108 噓して五番ホームのベンチ起つ  
寺内 侖(埼玉県)
- 109 幼子と見上ぐる空に風光る  
中川義彦(新潟県)
- 110 一町の春田のありて平なり  
光成高志(千葉県)
- 111 冬萌や一粒づつにカラーあり  
黒石正子(埼玉県)
- 112 卒業子島に一礼島を去る  
本間 進(新潟県)
- 113 石垣にほほえみひとつふきのたう  
本間ミネ(新潟県)
- 114 産声のうごめく数や猫の春  
日名子春実(群馬県)
- 115 雪はねて竹は素直な風となる  
鏡たか子(山形県)
- 116 雪の夜や胸に沁み入る三千雄の詩  
中村万年青(京都府)
- 117 潮の満ち春ふくらむ運河かな  
服部八重子(東京都)
- 118 魚氷に上る喝采のピチカート  
桜井葉子(千葉県)
- 119 初荷行く雲一つなき日本橋  
永田歌子(埼玉県)
- 120 陽炎へる閉校近き校舎の黙  
清水君江(埼玉県)
- 121 ダイヤモンド婚ともに迎えん初御空  
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 122 夕風の粗くなりたる路の臺  
敷原保子(東京都)
- 123 晩学の句をよみあぐね寒の月  
柴田恵美子(北海道)
- 124 空襲の夜空を語り花菜漬  
佐藤 信(神奈川県)
- 125 佐保姫の紅の一佩き櫻梢  
安田芳江(茨城県)
- 126 日と風と若草の野へスニーカー  
九法活恵(埼玉県)
- 127 春の池恋する鯉がうごきだす  
若林卓宣(三重県)
- 128 春シヨールいつもの道の喫茶店  
小澤弘子(東京都)
- 129 菜の花を摘む手にやわらな風のあり  
沖 惇子(大阪府)
- 130 いつ開く福寿草の香ぐわしき  
湯浅暉子(石川県)
- 131 探梅や週に一度の休診日  
間森 坦(兵庫県)
- 132 炭坑絶えて石炭は消え残りたる菓  
子は羊羹黒タイヤなり  
濱田イサオ(福岡県)
- 133 白鳥の親はうす茶の子の脇に赤城  
風を遮りつつ浮く  
青木日出男(群馬県)
- 134 重みなき首相の言葉丁寧に真摯に  
と云うに遠き答弁  
桑原謙一(群馬県)
- 135 廃車した置きし車を振り返る共に走  
りし長き年月 北澤実夫(東京都)
- 136 開拓にいそしみ生きて三万日お  
らー東京海もしらねー  
黒澤正行(福島県)
- 137 雲間より深夜三時の月冴えて狭庭  
の雪もきらきらと映ゆ  
田中豊恵(新潟県)
- 138 ヒヨドリと四十雀も宣戦の餌場を  
守るスズメ將軍  
早坂絃司(北海道)
- 139 店を息に替りて八十路コーラスを  
カラオケにしてラフに生きむと  
高須 孝(愛知県)
- 140 奄美沖ザトウクジラがやってきた  
恋の季節地球は生きてる  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 141 ねむりおる夫のひたいにそっと手  
を細く目を明け少しほゝえみ  
佐伯セツ子(香川県)
- 142 いくどなく職を転々娘のあかし社  
会に吾も老ゆを伝ふなり  
北野耕兵(千葉県)

短歌



- 143 ペンは差す生体マトリックスポは  
話す忘れじ思う甲府に着けり  
土屋喜雄(山梨県)
- 144 わが部屋の本棚を埋めし愛蔵書遺すに  
つらき訣別に迷う  
寒川靖子(香川県)
- 145 新しき春に雪舞ふ静けさに電池替へたる掛時計鳴る  
野木宗信(奈良県)
- 146 寝すがたの蠅追ふもけふがかぎり  
哉看取り得し一茶われは羨しも  
高橋卓二(新潟県)
- 147 人生の停年いつかまたるる宝船来るまで  
咲こうはんなりと  
阿部澄江(宮城県)
- 148 アリランの調べ哀しや峠越え唄う  
乙女の幸い見まもる  
内藤明子(東京都)
- 149 パチパチと火の粉の歌や杵の音老若集い  
彼岸の前に  
合田浩子(茨城県)
- 150 悠然と四回転の秘技こなし怪我のあとを  
も見せず漢たり  
齊藤安弘(神奈川県)
- 151 年賀状今年で最後と添え書きに古き友より  
淋しいたより  
門田善二(兵庫県)
- 152 短詩の微を消しに消しこむ詩人いて  
それは全然ちがうとおもう  
安部 哲(新潟県)
- 153 ふと見れば河津桜の咲き初めてキラキラ  
愛し満開待たる  
峯岸信子(東京都)
- 154 春の陽はもうこゝに来てますと暖房止めて  
暦をながむ  
高橋登志子(新潟県)
- 155 声高く学生の行くこの朝に寒風の中  
自転車こぎて  
中沢敬子(千葉県)
- 156 笑み浮かべ晴着姿で立つ孫の成人までの  
曲折思う  
関原幸子(東京都)
- 157 御来光真白き富士とスカイツリー橋の上より  
通勤の朝  
大鳥居牧子(東京都)
- 158 免許証返納せしと同級生我も早晩これに  
做ふか  
久本に地(岡山県)
- 159 初孫子に歯がはえそめて光り受く日本の  
未来託すぞ  
君ら  
北岡 晃(兵庫県)
- 160 冷や水の横好き愉し五七五生きるよすが  
となりて久しき  
村山徳英(埼玉県)
- 161 あやとりを祖母に習うと集う子ら  
ゆびぬきワザはマジックショーに  
坂元正憲(東京都)
- 162 望月の欠けゆくさまの月食の天体ショーを  
湯屋より眺む  
山田良男(埼玉県)
- 163 震災を忘れてならじと今もなお携帯開き  
写真に見入る  
早坂保文(宮城県)
- 164 ふりかかる火の粉をあびて春待ちの古都  
あかあかと修二(会終りぬ)  
岩崎令子(大阪府)
- 165 抽選で東京マラソン走れたが関門規制で  
無念の棄権  
新井 賢(埼玉県)
- 166 天を打つこぶしの如く梅蕾王朝偲ぶ香り  
間近に  
島田實貴男(群馬県)
- 167 何となく心落ち着く花曇り  
細川光子(栃木県)
- 168 午後二時が一番きれいな花時計  
木村洋一(新潟県)
- 169 割印が崩れたようなパンダの目  
丸山芳夫(東京都)
- 170 寒空に月色をかえかたち変え  
石原 岳(群馬県)
- 171 春よ来い笑い袋を提げて来い  
渡部美代子(山形県)
- 172 水上で飛んだり跳ねたり越後獅子  
山口静一(東京都)
- 173 手足まだ動く今日することもある  
小山恵美子(大阪府)
- 174 隠れ酒あちこちバレーで打つ手なし  
坪田勝秀(鹿児島県)
- 175 無我夢中妻と築いたマイホーム  
佐藤朗々(東京都)
- 176 子供らと同じ目線で未来見る  
鈴木義雄(福島県)
- 177 二本立て映画の頃が懐かしい  
原 崇雄(埼玉県)
- 178 ピンピンでころり逝きたい人ばかり  
守屋高雄(岩手県)
- 179 うかうかとしている内に高齢者  
山口千鶴子(東京都)
- 180 引越してから善い人になる隣  
長谷川庄二郎(千葉県)
- 181 カジノより安楽死法急ぐべし  
阿部 至(埼玉県)
- 182 大マスク主治医の素顔みて見たい  
大久保アヤ子(東京都)
- 183 大吉を信じリハビリくり返す  
近藤富夫(東京都)
- 184 AIの超高波に人溺れ  
宇都木安子(東京都)
- 185 居座るもいいかげんにし寒気団  
奥那於子(大阪府)
- 186 バースデイ検査の結果吉となれ  
大橋絵代(千葉県)
- 187 カーテンを開けしパンタもひなたほこ  
柳澤京子(宮城県)
- 188 どっこいしょ！声ほど出ないうで力  
和崎治人(山口県)
- 189 夢かなえ四国遍路へ出かけた！  
久保壽雄(北海道)
- 190 時々愚痴の受け皿出してやる  
目黒豊光(福島県)
- 191 老犬の薬と食事同窓会  
油谷博子(兵庫県)
- 192 旧友とお喋り弾む雛巡り  
西山知子(岡山県)
- 193 「しゃらくせえ」写楽はすぐに鼻つまむ  
橋本世紀男(東京都)
- 194 米朝トップ会談兵役者の死ぬ前に  
菅井文男(新潟県)

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：伊丹三樹彦さん)

フォトイック



- 201 青空の夢は捨てない籠の鳥  
石原 岳(群馬県)
- 202 春の空目指し飛びたし籠の鳥  
天野輝子(東京都)
- 203 うぐいすも鳥も謳歌の春の庭  
渡部美代子(山形県)
- 204 おしやべりの天まで届く百千鳥  
片山茂子(埼玉県)
- 205 青い空自由に翔んでる夢を抱く  
小山恵美子(大阪府)
- 206 君達もやっぱり空を飛びたいの  
田中豊恵(新潟県)
- 207 啓蟄の空晴れ晴れや籠の鳥  
近藤薫也(千葉県)
- 208 梅咲けば老爺鳥籠持ち歩く  
居原田暹(大阪府)
- 209 囚はれの鳥ものんびり春うらら  
井原毬子(東京都)
- 210 青空へ吊す鳥籠囀れり  
梶 進(北海道)
- 211 姿無く並ぶ鳥籠春の雲  
津田忠彦(岡山県)
- 212 かごの鳥今日は居酒屋行けぬ夜  
佐藤朗々(東京都)
- 213 一斉につるす鳥かご春の雲  
堅田秀子(東京都)
- 214 大空へ自由に飛びたいカゴの鳥  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 215 薫風や空がこんなに着いのに  
橋本良子(埼玉県)
- 216 囀を聴かす歌を忘れたカナリアに  
鈴木岑夫(千葉県)
- 217 籠の鳥がほしい明日より今日の自由  
長峰正晴(千葉県)
- 218 愛鳥を鳴き合わせをり春きざす  
三津木俊幸(千葉県)
- 219 カゴの鳥どの娘がほしい名指しされ  
佐伯セツ子(香川県)
- 220 春空へ飛びたきこゑや籠の鳥  
小澤円梨(静岡県)
- 221 秋天に空の鳥籠ぶら下げて  
佐野和彦(静岡県)
- 222 飛び立ちて春の大空存分に  
藤井春三(埼玉県)
- 223 空っぽになったふると籠の鳥  
松田重信(埼玉県)
- 224 ゴンドラで羽を休める籠の鳥  
長谷川庄二郎(千葉県)
- 225 囀りは耳の葉よほんまだす  
岩村 昇(神奈川県)
- 226 鳥籠にとじこめられて春を待つ  
水落重式(新潟県)
- 227 空中のブランコ散歩青き空  
清まさじ(静岡県)
- 228 いつまでも過保護にしないで春空へ  
神 一男(静岡県)
- 229 カナリヤの美声を競う舞台かな  
宇都木安子(東京都)
- 230 大空に飛び立つ夢や籠の鳥  
大阿久雅子(埼玉県)
- 231 青空に小鳥逃がしてあげたいな  
奥那於子(大阪府)
- 232 今すぐに鳥かごあけて逃がしたい  
阿部澄江(宮城県)
- 233 「悲しいよ」大空飛べない鳥なんて  
阿部徳夫(宮城県)
- 234 大空へとびたい鳥の小さくて  
浅海和代(東京都)
- 235 ゴンドラに乗った気分の九官鳥  
和崎治人(山口県)
- 236 うぐいすの一路鳴きくらべ  
合田浩子(茨城県)
- 237 国という鳥籠に居るスケーター  
星 一子(神奈川県)
- 238 籠の鳥社会の中へ飛び去りぬ  
齊藤安弘(神奈川県)
- 239 青い鳥老人ホームといふ籠の  
有田裕子(北海道)
- 240 小春日に鈴振る唄声どこまでも  
菅原キイ子(宮城県)
- 241 さわやかやゴンドラになった籠の鳥  
高垣勝代(大阪府)
- 242 小鳥かご陽に当てながら畑しごと  
高橋登志子(新潟県)
- 243 春天や飛ぶ夢を見る籠の鳥  
関原幸子(東京都)
- 244 籠の鳥人が入って遊ぶ園  
五十嵐陸博(新潟県)
- 245 太陽にいつぱいあびる籠の鳥  
大鳥居牧子(東京都)
- 246 青空へ木々へ飛びたいかごの鳥  
久本にい地(岡山県)
- 247 青空へ旅立つ頃や囀れり  
本庄準也(埼玉県)
- 248 浅春の空へと放つ籠の鳥  
平山千江(岩手県)
- 249 大空を飛べる日はいつ籠の鳥  
岡村君枝(茨城県)
- 250 雄鳥の鳴き声競ふ春の庭  
中野勝子(鹿児島県)
- 251 夢の中大空飛んだかごの鳥  
中林恵子(大阪府)
- 252 青空に放してやりたい籠の鳥  
松前邦広(千葉県)
- 253 小鳥帰るいずれの籠も静かなり  
寺内 侖(埼玉県)
- 254 浮雲の春日久しき籠の鳥  
村山徳英(埼玉県)
- 255 幾つもの吊る鳥籠の囀れり  
光成高志(千葉県)
- 256 かごの鳥互ひのかごをうらやんで  
本間 進(新潟県)
- 257 囀りの朝天空へ声を張る  
日名子春実(群馬県)
- 258 一度だけ出してください春空へ  
山田薬山(埼玉県)
- 259 逢いに来てもう日が暮れる籠の鳥  
鏡たか子(山形県)
- 260 ゴンドラか大鷲用の鳥籠か  
橋本世紀男(東京都)
- 261 籠の鳥の鳴き合せはご免だ  
菅井文男(新潟県)
- 262 鳥かごのひーふーみーや凍てゆるむ  
桜井葉子(千葉県)
- 263 しあわせや吾の籠には鍵はない  
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 264 春近し愛のささやきかごの鳥  
岩崎令子(大阪府)
- 265 春や今旅立ち準備完了す  
安田芳江(茨城県)
- 266 大空のもとに囀カゴの鳥  
九法活恵(埼玉県)

※2月号掲載の句に誤りがありました。  
お詫びして訂正いたします。  
90平成の夜を振り返る年の果て 大谷  
茂(埼玉県) 正…世

## 俳句・川柳募集!!



(写真提供…中川三郎さん)

上の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。  
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎短歌部門

27 今年こそぜひ会いたいと添え書きの賀状が届く訃報と共に

岩崎令子(大阪府)

・今は元気でも明日はの年に成りました 田中豊恵(新潟県)・私も今年同じ体験をして、共感しました 関原幸子(東京都)・一枚のハガキは時として人々の心を幸せにしてくれる。新年に届く二枚のハガキは切なく、やる瀬なく一人淋しい時間になります 坂元正憲(東京都)・私も似たような経験があります 橋本世紀男(東京都)・かなしみがよく表現されています 新井 賢(埼玉県)

19 身を屈め歪な足の爪を切る余生支へる足いとほしむ

久本にい地(岡山県)

・俺も、作者の足をハグしてやりたい 早坂絃司(北海道)・つめを切るのが大変なので 高須 孝(愛知県)・身につまされます。老いと足の爪は切りにくく、私も同様。でも支えてくれる足、免許返上。歩け歩けです 津田忠彦(岡山県)

◎川柳部門

47 徘徊と散歩の区別出来ません

岩崎政弘(岡山県)

・外見ではこの区別は難しいでしょう 西條公雄(埼玉県)・B型なのでその日々の思いのままで歩いていきます。目的はあり、ポスト、振込、院へと歩くのが好きなのです 佐伯セツ子(香川県)・将来の自分の姿かと想像します。目標一日五千歩ですが、一万歩になっても家に帰らなければ… 奥那於子

(大阪府)・寿命が延び高齢者が増えている。健康のために歩いている人を見かけるが、散歩か徘徊か分からない場合がある 久本にい地(岡山県)

32 マスクして帽子目深かなどちら様

石原 岳(群馬県)

・マスクして帽子かぶった友に声をかけられてもどなた様と声かける 大久保アヤ子(東京都)・夏の事ですがサンシェードの帽子をかぶった女性が挨拶をされて通り過ぎました。だれかさっぱりわかりませんでした 和崎治人(山口県)・あいさつされてもマスクで声もくぐもって誰かわからないもどかしさの実感 岩崎令子(大阪府)ほか

◎俳句部門

110 手をにぎるだけの介護や冬桜

関山恵一(神奈川県)

・介護する作者の心情のじむ作品に感銘しました 大谷 茂(埼玉県)・私の亡き母の介護と重なり思出す句です 小澤円梨(静岡県)・介護といっても、なかなか良くできない。手を握るだけでやさしさがわかる 岩田 信(神奈川県)・現在の自分の様です。まだ声も出て、反応はありますが手をにぎる事ね。大事なスキンシップです

星 一子(神奈川県)・寂しさとやわらかな暖かさを感じる季語とにぎるだけの介護のとり合せお上手です 高垣勝代(大阪府)・肌のぬくもりを伝えることが一番のいやしだと思います。冬桜のあっせんがすばらしい！一瀬正子(埼玉県)・母の長い介護の終わりの幾日かを想い出しました。悲しかったですがその手には大きな愛と絆が

あったと思います 中山日出子(大阪府)・手は「外の大脳」といわれます。きつと「こころ」が伝わっています。繊細な感性に共感 中村康浩(福岡県)・「手をにぎるだけ」の措辞の中には様々な思いがあると思います。寺内 侖(埼玉県)ほか

105 山眠る山のごとくに妻眠る

井上静夫(栃木県)

・さぞご主人より奥様の方が体が大きいのか？奥さんの寝高が大きく山のごとくがなかなかおもしろい 重原爽美(新潟県)・妻の安眠が微笑ましい 佐野和彦(静岡県)・我が家の妻も同じ。主婦は疲れるのですね。特に齢を重ねると。止むを得ないことです。お互いあれこれ批判しながら老いていくのです 岩村 昇(神奈川県)・私もこんなに眠りたいです 清まさじ(静岡県)・静かな時がゆっくり流れて 菅原キイチ(宮城県)

126 てのひらをひらいて入る焚火の輪

中村康浩(福岡県)

・声まで聞えてきそうです 椋本望生(大阪府)・焚火にあたる前からかざす手をひらいているという視点が面白い。その人の姿、人柄も見えてくる 高松玲子(埼玉県)・焚火とはこういうものでした。みることさえできなくなりなつかしさをかきたてられます 中澤寿美(神奈川県)・焚火に入る表現でのひらをひらくとは初めて。確かに皆、手のひらをひらいてゆつたりしている 藪原保子(東京都)ほか

◎フォトイック

今回大賞はありませんでした。

※今後ふるってご投稿をお願いいたします！

◎他にも

1 三万日生きて今が老い盛り存へて待つ老いの完熟 黒澤正行(福島県)

3 新雪を纏いし雑木見下ろせば絵画一幅見ているが如 田中豊恵(新潟県)

14 風のなき一日終わり日記書く心の音や色を感じて 阿部澄江(宮城県)

16 一日の介護もうけず逝きし姉ピンピンコロリみんなの願い 野木宗信(奈良県)

34 トランプのハート足りないアメリカ力製 橋本世紀男(東京都)

40 丁寧といふ意味辞書で引いてみる 小林七重(新潟県)

50 通信簿を見せつつ親の顔を見る 奥那於子(大阪府)

65 外食の夫婦勤労感謝の日 山崎吉晴(群馬県)

66 バイパスを渡り切れない狸かな 中嶋光江(埼玉県)

72 寒凧や雪と見紛ふ佐渡島 川口 襄(埼玉県)

75 しんがり時が時に先頭鳥渡る 三津木俊幸(千葉県)

174 身の丈に生きて妻との初詣 本間 進(新潟県)

208 虹かかるふたりの世界無限大 小山恵美子(大阪府)

219 うらやまし国境越えていく自由 長峰正晴(千葉県)

235 この虹が消えない中にプロポーズ 鏡たか子(山形県)



Q 前回のアンケート  
春になると行きたくなる  
ところはどこですか？

★桜

- ・桜並木の散歩 細川光子(栃木県)
- ・土手に咲く桜並木の見える所 白松いちろう(千葉県)
- ・JR中央線「国立駅」からの大学通り 田野倉訓郎(東京都)
- ・芝ざくら公園 石原 岳(群馬県)
- ・四月に桜の名所、五月に山中湖など予定が決まっています 小山恵美子(大阪府)
- ・桜の園(チューホフのような) 居原田暹(大阪府)
- ・早咲きの河津桜を見に行きたい! 井原穂子(東京都)
- ・滝桜 大谷 茂(埼玉県)
- ・あちこちの「さくら」を見に行く。 吉野へもう一度夢みて 橋本良子(埼玉県)
- ・ほとんど人の来ない小公園に咲く「二本の大桜」 鈴木岑夫(千葉県)
- ・神社仏閣の花見散歩 石尾曠師朗(東京都)
- ・各城に咲いている花見 小澤円梨(静岡県)
- ・吉野山 野木宗信(奈良県)
- ・岩手県北上市の展勝地 阿部徳夫(宮城県)
- ・近隣の一本桜。特に老桜を見に行きます 中山日出子(大阪府)
- ・飛鳥山公園 関原幸子(東京都)
- ・観桜会場、友と花見 五十嵐陸博(新潟県)

- ・毎年花見の時に川をせき止めて花見舟が出ます。舟からの桜は絶景 松前邦広(千葉県)
- ・妹達と花見旅行がしたいなあ 油谷博子(兵庫県)
- ・城とさくらの景勝地 村山徳英(埼玉県)
- ・今年は上野寛永寺に行かねばならぬ用あり 光成高志(千葉県)
- ・埼玉権現堂川の桜堤 山田楽山(埼玉県)
- ・町にまほろば緑道と云う桜並木の歩道がある。そこをゆっくり愛でながら... 鏡たか子(山形県)
- ・河川敷。何百の桜が咲きます 清まさじ(静岡県)



★梅

- ・近所の梅園 西條公雄(埼玉県)
- ・梅の咲く公園 鈴木義雄(福島県)
- ・大阪城梅林へ行きます 大窪美代子(大阪府)
- ・梅の花のつぼみを観察し、そのつどふくらみの変化に気づきたい。葉の様子も 大鳥居牧子(東京都)
- ・湯島天神 甘酒を手に梅を愛でること 寺内 佶(埼玉県)など
- ★植物園・花畑 内河邦久(東京都)
- ・植物公園など 野草園などの植物園 井田由利子(宮城県)
- ・大花園 岡村君枝(茨城県)

- ・植物園に行つて色々なお花を見たいです 片山茂子(埼玉県)
- ・房総の花畑。春がきたことを一番早く感じる所 長峰正晴(千葉県)
- ・一面の菜の花畑 若月理依子(新潟県)
- ・菜の花畑 三津木俊幸(千葉県)
- ・ミツバチのように蓮華畑、菜の花畑を求めて散歩に出ます 奥那於子(大阪府)
- ・れんげ畑 中村久仁子(京都府)



★公園

- ・横浜山下公園 河野静子(埼玉県)
- ・井の頭公園 高崎登喜子(東京都)
- ・昭和記念公園 天野輝子(東京都)
- ・富士市の岩本山公園 杉原明子(静岡県)
- ・藤房の大庭園 吉村充治(埼玉県)
- ・あちこちの公園 田中こづえ(北海道)
- ・埼玉県川口市立グリーンセンター(庭園) 仁藤ひろじ(埼玉県)
- ・東京には沢山あるのでゆっくり花見に! 張山てる子(東京都)
- ★河川敷、川 濱田イサオ(福岡県)
- ・河川敷(野遊び)
- ・利根川より水温が高い小河川に鮒が乗りこんで来ますので川へ 青木日出男(群馬県)
- ・まだ雪が残る山を見ながら最上川 松尾らん(東京都)

- ・隅田川畔(水上バスに乗りたいたい) 松嶋光秋(東京都)
- ・ふるさとの山から流れる小川のほとり 寒川靖子(香川県)
- ・河川敷でのつみくさよもぎ他 中嶋清子(佐賀県)
- ・近所の小川とその辺りの野原。両岸に菜の花。色とりどりの野草に会える 大阿久雅子(埼玉県)
- ・河川敷好きです 門田善二(兵庫県)
- ・新河岸川<sup>の</sup>の土手 一瀬正子(埼玉県)
- ・荒川の支流の新河岸川沿いの土手の桜並木と菜の花と猫に会うこと 高松玲子(埼玉県)
- ・公園や川べりに散歩の歩をのぼし俳句を詠みます 橋本世紀男(東京都)
- ・隅田川、向島、浅草へ行き川を下る 藪原保子(東京都)

★山

- ・山の温泉。残雪がある所 木村洋一(新潟県)
- ・緑豊かな山 北岡 晃(兵庫県)
- ・山、野原(小さい春見つけた) 渡部美代子(山形県)
- ・栗駒山。老体の今はとても無理です 柳澤京子(宮城県)
- ・山の木々芽吹く頃あの初々しい淡い緑がこれから生きる息吹を感じさせます 木村 舩(山形県)
- ・野山。感動と生きる力をもらう 高垣勝代(大阪府)
- ・カタクリやチゴユリの咲く里山 早坂保文(宮城県)
- ・高尾山 佐藤 信(神奈川県)
- ★山菜・林 浅海和代(東京都)
- ・新芽の出た林



- ・山へ山菜採りに行くこと  
重原爽美(新潟県)
- ・雪消えをまって露の臺を取りに行くのが楽しみ  
田中豊恵(新潟県)
- ・海岸近くに生える「つわ」を取りに行く  
濱崎祥子(鹿児島県)
- ・山や河川敷に山菜取りに行きたい  
久保壽雄(北海道)
- ・春山での山菜とり  
中川義彦(新潟県)
- ・山菜採りの講習では、五十種以上の山菜と十五種程の毒草について説明。調理もしています  
赤塚五行(新潟県)
- ・山菜料理を食べに行くこと  
阿部 至(埼玉県)
- ・ふきのとうの出ている畦道  
本間ミネ(新潟県)
- ・玉原高原の芽吹きがブナ林  
桑原謙一(群馬県)
- ★海  
「春の海」。海無し県に生まれ、今年も春の海を楽しみにしています  
田野井一夫(栃木県)
- ・なんといつても海  
梶 鴻風(北海道)
- ・海の見える処  
宮崎敏昭(埼玉県)
- ・瀬戸の海  
湯浅芳郎(岡山県)
- ・海、江の島、日本海  
五味田幸夫(栃木県)
- ・波の穏やかな海辺  
平林義康(兵庫県)
- ★その他  
・信州・安曇野一人旅  
福岡 悟(東京都)
- ・女学校卒業後に友達と歌をうたったあの丘  
檜山柚子香(東京都)

- ・安曇野と琵琶湖  
古谷 力(東京都)
- ・天職の野良仕事を早くしたい  
黒澤正行(福島県)
- ・神田神保町の古書街  
上村元義(神奈川県)
- ・川西中学校のテニスコート  
早坂紘司(北海道)
- ・南会津溪流!! 待ちに待った初釣りです  
井上静夫(栃木県)
- ・湘南モノレールに乗って江の島  
吉里ひとみ(東京都)
- ・最後の職場をちよっとみてみたい  
坪田勝秀(鹿児島県)
- ・「春岬」夢が甦ります  
有坂馨園(福島県)
- ・上野の森の美術館巡り  
堅田秀子(東京都)
- ・ゴルフ、下手ですが仲間とのプレーは最高  
原 崇雄(埼玉県)
- ・足立美術館庭園  
田中 昶(鳥取県)
- ・鎌倉。海があり山があり花の寺があります  
関山恵一(神奈川県)
- ・つくしのいっぱい出ている野原  
有島和子(東京都)
- ・遊園地  
土屋喜雄(山梨県)
- ・鈍行列車で北に向かって  
藤井春三(埼玉県)
- ・動物園や水族館。春を迎える自然の姿が励ましや生甲斐を与えてくれる  
浦橋克行(兵庫県)
- ・「恋の広場」これホントよ!  
松田重信(埼玉県)
- ・箱根十国峠。昔行ったところ。宇野舞鶴の海岸。幼少のころ過した地域  
岩村 昇(神奈川県)
- ・富士五湖の春へ行きたい  
神 一男(静岡県)

- ・故郷(佐渡)  
水落重式(新潟県)
- ・自家菜園です。春先の手入れ(追肥防鳥ネット)が何よりの楽しみ  
小林七重(新潟県)
- ・プラネタリウム  
内藤明子(東京都)
- ・彼岸の墓まいり。兄妹仲よく父母を偲んで  
合田浩子(茨城県)
- ・秩父路  
岡野智恵子(埼玉県)
- ・京都  
望月哲土(東京都)
- ・裏五頭山麓  
小島岳青(新潟県)
- ・地域の八幡様の四阿  
菅原キイ子(宮城県)
- ・府中市上下町の雛祭り  
井上氣海(広島県)
- ・鎌倉の「花の寺」めぐり  
目黒豊光(福島県)
- ・温泉で湯ったり  
大橋恒次(新潟県)
- ・在来線(特に越後線)で近場のあちこちに行きたい  
白川 博(新潟県)
- ・犬島(瀬戸内海の小島) 三十年前勤めた小学校があった。海へ散る桜がきれい  
久本にい地(岡山県)
- ・平泉  
平山千江(岩手県)
- ・露天風呂  
中野勝子(鹿児島県)
- ・大きな枝垂れ桜と白木蓮のあるお宅の庭  
中林恵子(大阪府)
- ・ゴルフ場  
坂元正憲(東京都)
- ・雪国なので春の花が咲いている半島や岬に行きたくなります  
本間 進(新潟県)
- ・眺めの良い温泉地  
菅井文男(新潟県)
- ・高層建築の見えない緑あふれる野原  
桜井葉子(千葉県)



トラバエルマスタース  
代表取締役 鹿島純一さん

「50年来の愛着ある山」

春の行楽シーズン到来。新潟発 日本で一番親切な旅行社をめざすトラバエルマスタースの代表取締役で、海外60カ国、特にイタリアは30回以上の渡航歴を誇る鹿島純一さんに、春のお勧めスポットをご紹介します。

「健康寿命」という言葉をよく耳にするようになりましたが、それにぴったりの登山です。弊社  
の山旅も昨年は県内外から4,000名近い方がご  
参加くださいました。その社長である私が春にお勧  
めするところはおきの山が「花の名山」「角田山」で  
す。いつも登る稲島口からは山頂近くの観音堂まで  
ゆっくり登って約1時間。観音堂からは広大な越後  
平野が広がり、反対側の日本海には佐渡島が大きく  
横たわっています。4月の下旬になると山道にはカタクリやユキワリソウが咲き  
乱れ、関東や関西などから多くの登山者がやってきます。もう50年近く前、8  
km離れた小学校から歩いて登ったのが私と角田山とのご縁の始まり。6年前に  
日本百名山を完登した今でも、「一番愛着のある山は？」と聞かれれば迷わず角  
田山。初心者でも気軽に登れる花の名山角田山。この春のおすすめの山旅です。



2-3月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！皆様からのメッセージが、私どもスタッフの励みです。率直なご感想や親身なアドバイス、いつもありがとうございます。皆様のお声で、情報誌「喜怒哀楽」がつくられていきます。

- ・ 菜根譚 「風、疎竹に来るも、風過ぎて竹に声を留めず」に感銘しました。一瞬一瞬を大事に、しかし過ぎた後はそのことに捉われ過ぎない。大切にしたい言葉と実際の行動です。
- ・ 知音句会の行方先生にはびっくり！その指導力に感心し、お髪の色には驚く！手の届かない俳句会です。
- ・ 中原操雪先生は人間社会の手本です。病気・離婚・障害者なるも、たくましい気力・勇気・更には女性としての優しさに人生の詩、川柳が生きています。
- ・ 年間大賞の句私も選びました。しぐれから長い冬。記録的な酷寒の日々をどう耐えて来たか大きく育っているのかと思いをめぐらせて泣けて来ました。幸いあれと思っています。
- ・ 青木日出男さんの記事が良かったと思いますし面白かった。ちなみに青木氏と同郷です。
- ・ 新潟ぶらり 私は囲碁・将棋も趣味にしていますが、「坂口安吾と将棋の関係」は知りませんでした。新潟は文人・偉人が多いですね。
- ・ 堀口大学の「月下の一群」は好きでよく口遊んでいました。長岡に住んでいた事を初めて知りました。
- ・ 岩田桂さんの「蛸しゃぶ」エッセイを楽しく読ませてもらいました。ドキュメントタッチの文体に自分もその場に居るかの如くです。
- ・ 小津夜景さんの「てぶら生活」あれこれ持ちたがった過去の自分が恥ずかしい。俳句の省略が下手なのはそのせいかも知れませんね。
- ・ オリジナルしおり いつも座右の銘として手にとり毎朝読み返し一日をスタートしています。ありがとうございます。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください！

## 新潟ぶらり

### ◆新潟県愛鳥センター

#### 紫雲寺さえずりの里

春になったらここに来たいと思ってた。新潟市東区から北へ車を走らせて40分。海沿いの松林、紫雲寺記念公園内に愛鳥センターはある。車のドアを開けると、鳥のさえずりが一斉に聞こえてきた。当センターは、野生鳥獣の普及啓発だけでなく傷病鳥獣保護の業務を担っており、展示室や探鳥路のほか飼育舎が設けられている。

展示室では剥製等から鳥について学べる。なかでも、さわれる標本コーナーでは20種類もの鳥の翼に直接ふれてその特徴を感じることができ、クロウの翼の触り心地がよかった。ブナ林のジオラマでは、鳥のさえずりがポタンで再生でき、あのさえずりはこの鳥のものだったのかと新たな発見。センターの裏手に広がる松林には探鳥路があり、一周1キロ、約30分でまわれる。観察池もある。でも何もいない。ほとりの観察舎に「静かにしていると現れる」という旨の立札があり、舎の小さな覗き窓から池を眺めることにした。5分と経たないうちに、カモが視界に入ってきた。立札の言う通り、野鳥観

察では静かに待つことが肝要らしい。

飼育舎では怪我をした鳥たちが保護されている。ストレスを与えないようにこっそり見つめる。つい3日前に来たコハクチョウ、平成13年からいるというクマタカなど収容期間は様々のよう。救護原因は衝突が多かった。

一周を終えてセンターに戻ると、カメラを携えた男性が「いま何が見れますかね」。スタッフの方が3月11日以降に見られた鳥を紹介し、もうすぐ見られなくなる鳥やこれから見られるであろう鳥も案内していた。そう、私たちは出会える鳥やその様子によって、季節を感じることができるのだ。

(菅真理子)



住所／新潟県新発田市藤塚浜海老池  
 電／0254-41-4500 入館料無料 9:00～16:00  
 休館／月曜（月曜が休日の場合はその翌日）年末年始（12/29～1/3）



にいがた  
文化の記憶館  
便り(19)

子どもと夢の世界

～日本のアンデルセン・小川未明  
日本童画の父・川上四郎

秋岡 啓子

新潟県内各地には古くからの民話が多く残っています。「昔あったてんがな」で始まり、「いきがポーンとさけた」「ざつと昔さげた」などで終わる、独特の言い回しを見かけたことはないでしょうか。

明治時代、日本の昔話や外国のおとぎ話を収集し、その普及に尽力して「おとぎのおじさん」と呼ばれた人物がいます。博文館の雑誌「少年世界」主筆を務めた巖谷小波いわやさなみです。「博文館」は長岡市出身の大橋佐平が創業した出版社。本連載第13回をご参照ください。明治24年刊行の巖谷作『こがね丸』は、日本の児童文学の嚆矢といわれます。虎に親を殺された犬の黄金丸の仇討ち物語でした。

大正時代に入ると、子どもにも一流の文学を与えるべきであるという考えから、大衆受けするおとぎ話ではなく、「創作童話」が多く書かれるようになります。その源流は、『人魚姫』、『マッチ売りの少女』などを書いたデンマークの作家アンデルセンです。そして、代表作『赤いろうそくと人魚』で知られ、「日本のアンデルセン」といわれるのが、新潟県上越市出身の小川未明（1882～1961年）です。

未明は44歳のとき小説の筆を折って、生涯を童

話に捧げる決心をしました。「自分は何時までも子供でありたい。たとへ子供であることが出来なくとも、子供のやうに楽しい感情と、若やかな空想とをいつまでも持つてゐたい」と宣言し、1000編を超える作品を残しました。未明は浜田広介（代表作『泣いた赤鬼』）、坪田譲二（代表作『善太と三平』）とともに「日本児童文学の三種の神器」とまでいわれました。

大正時代には鈴木三重吉が創刊した「赤い鳥」をはじめ、「金の船」「童話」「コドモノクニ」など児童雑誌が次々と刊行されました。それらを舞台に活躍し、「日本童画の父」といわれた画家が新潟県長岡市出身の川上四郎（1889～1983年）です。川上は東京美術学校（現東京藝大）で藤島武二に師事し、卒業後は中学校教師を経て出版社に入社。武井武雄、初山滋らとともに日本童画協会結成に参加し、童画界の第一人者となりました。戦争中、新潟県湯沢町に疎開して以来、永住の地と定め、豊かな自然の中で童画を描き続けました。

さて3年間この連載を担当してきましたが、4月から故郷の大阪へ戻ることになりました。「喜怒哀楽」読者様は熱心に感想をお伝えくださる方が多く、どれだけ心の支えとなったか知れませんが、これまで記事をお読みくださったすべての方、「喜怒哀楽」スタッフの皆様感謝します。「にいがた文化の記憶館便り」は筆者を変えて続きますので、引き続きご愛読賜りますと幸いです。ありがとうございます。



▲川上四郎「かもめの水兵さん」

【展覧会情報】

企画展示「子どもと夢の世界～日本のアンデルセン・小川未明、日本童画の父・川上四郎」  
会 期：4月27日(金)から6月24日(日) 休館日：月曜日（4/30は開館）、5月1日

【関連イベント】

4月28日(土)、5月26日(土)、6月23日(土)の午後2時～3時に、越後の語り手による「方言で民話を楽しもう!」という朗読イベントを行います。先着50名、要申し込み。ぜひご参加ください。



## 悲喜交々の筍掘り

岩田 桂

あなたは筍(竹の子)を掘り出したことがありますか。朝掘りの筍ほど、その一日を豊かにするものは他にありません。しかも自分の手で掘り出した筍ならば、なお更その気持ち強い。

この筍の楽しみは、温めのお酒で食べる生の薄切り「刺身」や「炙り焼き」です。掘り立てを料理するのがコツです。文句なしの絶品です(本当です)。その他、筍ご飯、若布との煮合わせ、味噌汁の具、和え物、天ぷらなど日本人と筍料理の関係はかなり深い。

ここで必ず覚えておきたいのは、筍は鮮度が落ちるのが早く「朝掘ったものはその日に食べよ」ということです。時間と共に急速にえぐ味が出てくるからです。早いもの勝ちと言った教えです。

その筍の旬は三月から五月始めにかけての短期間で、しかもぬか雨の後に多く顔を出します。これを「雨後の筍」といいます。さらに日本の食用筍のほとんどが、孟宗竹で占められています。

通称「孟さん」と言われる竹の種類です。この筍のはしりは二月です。筍を語る場合はやはり、筍を掘り出す体験をすべきです。さっそく奥美濃の竹藪に出かけました。

### 朝市に春竹の子がもう出たか

さすが筍の採れるその竹藪は、手入れが行き届いていません。落ち葉がこんもりと降り積もって、竹藪全体が柔らかい状態です。その落葉をかき分けて孟宗竹の赤ちゃんが、地中から顔を出しかけたのを探し、選んで掘り起こすわけです。

しかし素人では、なかなかその赤ちゃんを見つかるのは難しいものです。代わりにリーダーの村人が、棒先で落葉をかき分けながら探してくれます。そして見つけたら、「おお！よう顔を出したな！」など

と声をかけながら指で指図してくれます。「ここにがあるべえ」と声をかけてくれます。

さっそく筍のトンがり頭の周りの枯葉や土を手で払いのけます。そして大よその大きさや深さを推し量ります。いよいよ筍掘りの一太刀を、振り下ろす瞬間がきます。

### 筍掘り蹴下ろす人探る人

念仏を唱える気持ちで「いざー参らせるー」と言いながら、シヤベルのような鎌を、筍の隠れた根元に一気に打ち下ろします。浅くても深くてもダメです。この一太刀は、打ち首をするような切なさで、当然手ごたえの中に残ります。もちろん名人ともなれば、一太刀で掘り起こします。

しかし初心者には斜めに打ち首された筍ほど、無惨なものはありません。手元を狂わして失敗すると、筍の赤ちゃんに可哀想なコトをしてしまったという、虚しさに苛まれたりします。「ゴメン、許してくれ、手をつけて謝るからね」と意気消沈。ここらが筍掘りの難しさで切なさです。

また欲を張って、竹藪の赤ちゃん全てを掘り起こしてはいけません。これとあれはと言うように、ちゃんと次世代に残さねばなりません。その選別は、リーダーの村人や地主さんが指図するのが通例です。

この掘り出した筍は、まるで合戦の生首を掲げるような誇り顔で持ち帰り、家の土間に並べ置きます。しかしここからが忙しいのです。自慢している時間などはありません。掘り立ては十五分もするとアクが出るためです。いかに早く茹でてしまおうかが勝負だからです。皮むきは家族総出でやります。青臭い匂いが家中に漂います。「おお！これが家族



団らんのかい！」等と、感傷に浸る時間はありません。とにかく急ぎます。そして米糠と鷹の爪を入れた鍋でクツクツ一時間ほど煮立て冷やします。

こうして煮立てた筍は保存されて、様々な料理に使われます。

### 竹の子を煮る大鍋の噴きこぼれ

この一家総出の家族形態を「竹の子家族」と言います。もちろん最近では、このような家族は見当たらなくなりました。

またこの筍の皮は子供たちには、格好のおやつ道具に使われます。漬け込んだ梅干しの紫蘇の葉を、筍の皮に挟み込んで折りたたみ、その皮の表面を口でチュウチュウ吸いながらしゃぶります。

しばらくすると、紫蘇の甘酸っぱさが皮を通過して染み出てきます。そして次第に筍の皮も真っ赤に染まり、子供たちはチュウチュウと吸いながら、しばしの恍惚感に浸ります。

なんかこう、いじけた感じがあり、一人、暗く、頑張っているぞ、というこの楽しみは、ボクラ子ども頃の頃、甘酸っぱい恍惚の思い出のひとつとして、燦々と輝いています。

さて最後はどうしても「筍ご飯」に触れねばなりません。なぬ、筍ご飯、それがどないしたのや、と思いを馳せねばなりません。

その筍ご飯は、松茸ご飯やその他の五目御飯とは、一線を画しているのがエライ！というのが、専門家的一致した見解だからです。

歯ざわりといい、出汁味にあまり妥協しない孤独感といい、一本筋が通った頑固さを守り通しているのがえらいのです。「粗食のイメージにして貧ならず」「一押しのおふくろの味なり」などに加えて、繊維質豊富なケンコー貢献系であるのが、「筍ご飯・国民推奨協会」の密かな自慢の口上とも聞きます。

そういえば女性がよく好んで、食べている風景に出会います。ケンコー系だからなのでしょう。また、町のほかほか弁当屋にも、時折「タケノコご飯あります」という看板が出ます。

そんな看板が出ると、「買おうかな！買うのを止そうかな！」と悩んで、店の前をうろろうり行き戻りする人が増えると言います。その筍ご飯が湯気立って、風が光る初夏が訪れようとしています。

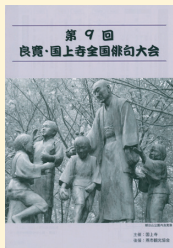
### 大盛の筍めしも昔かな





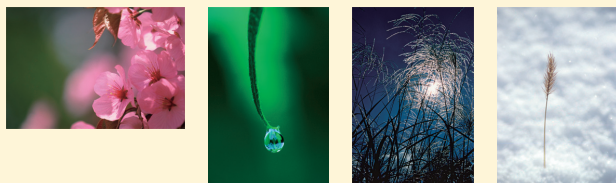
## 第9回 良寛・国上寺全国俳句大会

来たる9月24日(月・振替休日)、良寛さまゆかりの国上寺・五合庵で開かれる「第9回良寛・国上寺全国俳句大会」のチラシ兼投句用紙を同封しました。締切は6月30日(土)です。賞や様々な特典もありますので、ふるってご投稿ください。



## ポストカード販売しています!

春夏秋冬、各季節の草花を大胆に切り取ったポストカードを販売しています。今号(97号)に同封したのは「春のみち」。撮影した新潟市在住、高橋ノリユキさんは、この度「會津八一の歌を映す」第11回秋艸道人賞写真コンテストで、審査員特別賞を受賞しました。8枚1セット500円。ご希望の方は、必要分の切手を同封のうえ、封書にてお送りください。



## ブログとFacebook

ブログは営業日には毎日、Facebookは週に1回更新しています。本づくりのQ&A、出会った人、出会った言葉、日常のあれこれを綴っています。ぜひのぞいてみてください。

## 俳句の選句・整理サービス承ります!

せっかく書きためた俳句を一冊の句集にまとめた!という思いはあるものの…たくさんの俳句から選びきれない、選んだ句をどういふ順番で掲載しているかわからない…ということで二の足を踏んでいらっしゃる、そんなあなた様に朗報です。

俳句の整理・選句サービスを承っています。句集をまとめた!という方は、今すぐお問い合わせください。

お客様の困った!を解決したい



## 長年撮りためた写真、整理できていますか?

押入れの中、またはそこかしこに、今まで撮った写真の数々やアルバムが眠っていませんか。各時代の主だった写真を厳選し、生きてきた足跡を「ベストショットアルバム」としてまとめ、いつでも振り返ることができたらどんなにいいだろう!! と思ったことはありませんか。現在、当社では「写真の整理」をサービスとして提供することを考えています。

今、スタッフの父親の写真整理からスタートしています。皆さまの「こんなことで困っている」「こういうサービスがあるといい」というお声を、ぜひお聞かせください!



### スタッフの一言

Q. 春になると行きたくなくなる場所はどこですか?

※お客様手作りの真っ赤な苺のアクリルたわしに頬をせて

木戸 敦子



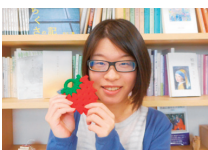
信濃川添いのジョギングコース。この時期に行かないことは考えられない!特に「春は曙ならぬ、つとめて&夜」。桜のトンネルを仰ぎつつ妖しいまでの幽玄の世界を堪能できます。

古川 久美子



のんびりまったりお花見とかしたいなあ……と思いつつ、毎年会社のお花見といそいそと出かける際に庭の桜をチラ見して終わる残念感。ピクニックとか行きたいかもしれない。

菅 真理子



会社の近くにある津島屋公園。毎年みんなでお花見ランチに行くのが楽しみで、春が近づいてくるとそわそわ。

山田 千秋



やはり、桜の名所です。しかも晴天の日に行きたいです。桜の見ごろの時期は短いので、休日かつ晴天かつ八分咲きの時が重なる年はとても花見冥利に尽きます。

木伏 美美恵



家を出てすぐの桜並木。おすすめは夕日をあびて優しい色でふわふわ揺れる桜。美しく、シャッターチャンス。子どもが誕生してから欠かさず記念写真を撮っています。

上村 眞智子



子どもの頃よく行った角田浜。砂浜に座ってうらうらした春の海を見ながら、ポーッとしたいものです。その後岩室の日帰り温泉に行けたらもう言うことないです。

石山 由希子



土手。子どもの頃、近くの土手(阿賀野川)で遊んでいました。明るい日差し、波のたぶんだぶんという音、ひばり、オオイヌノフグリ、それはキラキラした思い出です。

吉田 瞳



秋田県の角館武家屋敷の桜を観に行きたくなります。松木内川沿いを桜が一斉に散り花の舞う光景は本当素晴らしい!お昼は稲庭うどんで決まり!

佐々木 祥子



桜が咲いている所。特に八重桜や枝垂れ桜を見にドライブに行くのが楽しみです。晴天はもちろん、雨の中傘をさして眺める桜も好きですね。





## ふしぎな奥義

小津夜景

現在インターネット上でブログ日記をやっています。ブログを始めたきっかけは、おとしの秋に第一句集を出版したことです。

出版は嬉しい。ただ困ったことに、俳句を一人で書いてきた自分には句友がありません。さらに外国住まいのため知人もごくわずか。つまり自分から「本をつくったよ」と言わないかぎり、本が読まれるどころかその存在にさえ気づいてもらえない状況なのです。

はて。どうやって宣伝しよう。フェイスブックやツイッターで知らない人とつながるのは億劫だしなあ。あ。そうだブログなら日記を書くだけだし気楽かも。

と、こんな思いつきで、おそろおそろ始めたのでした。ブログ日記はもう一年半つづいていますが、いまでも慣れないことのひとつが「手書きでない日記は、おのずと文字主体になってしまう」といった現象です。

思い返せば、子供のころの日記帳は、だいたい半分くらいのスペースがらくがきで埋まっていました。洋服のコーディネートを描いたり、文字のまわりを花模様で囲んだり、カーボン紙をはさんで好きなイラストを写し取ったり、また文字を白抜きで書いたり、7色に色分けしたり、レオナルド・ダ・ヴィンチの手記のように謎文字を使ったり（両親の目をはばかることを書いていた）と、たいへん散漫かつ無計画に書き散らしていたものです。

前回の「手ぶら生活」に続き、小津ワールドを形成している一つ「独特の文体」を生み出す、その内幕の一端をご披露いただきました。テキストと見せかけての奥義、深いです。

ところがブログは手書きでないもので、そういうのがむずかしい。下手すると緊張してふと構えてしまうことも。

そんなこんなで、どうしたらいいのかなと悩みつつ、いつしか辿り着いたのが「日記に写真を添えること」へおしゃべりするように書くことへ「日記ではなく手紙だと思ふこと」の3点を意識したスタイルです。一例をでっちあげてみますと、まず一枚の写真をアップします。そしてその下に「あの、見てくださいこの写真を。今日出会った風景なのですけれど、空の色が素敵だと思いませんか？ あと雲の感じも。まるで明日の予告編みたい。ラヴ&マヨネーズ」といった感じで書く。

これで、一日分のブログのできあがりです。このくらいそわそわした、落ち着きのない文体が、自分には向いているようで、これだとその日の分が一瞬で書けてしまいます。

ここでひとつ、小声で言い添えたいのが、散漫かつ無計画にテキストに手を抜いてやっている、という意味では決してないこと。

むしろ手を抜くどころか、どうやら「散漫な気分でなにかをしている時こそ、逆説的にもっとも集中している状態にある」ようで、つまりこれは文体にまつわる自分なりのふしぎな奥義みたいですよ。

2018.4-5. vol.97 (2018年4月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29  
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

### 編集後記

4頁でご紹介した橋本さんの余録となるが「退職後は魂が干からびたみたいで、ビジネス書ではない本当の言葉を読みたくなった」と仰っていた。原点に、意味はわからなくても全部読んだという文学全集があったからなのだと感じた。1頁の若松さんの言葉「旅とは、自らの内なる原点に選っていこうとする人生の挑みのよう」、そして11頁の鹿島さんの「日本百名山を完登した今でも“一番愛着のある山は?”と聞かれれば、迷わずに最初に登った角田山」という言葉。やがて振り出しに、そして自らに戻る人生という旅。様々な顔を持つ春風とともに旅に出たくなりました。(木戸敦子)